

「人づくりは町づくり、町づくりは人づくり」

～地域と共に歩む学校教育をめざして～

地域の
特色ある
活動

京都府京丹波町教育委員会

1 はじめに

京丹波町は、京都府の中央部の丹波高原に位置し、面積 303 km²のうち森林が約 83%を占める町です。町内には、町立幼保連携型こども園 3 園、小学校 5 校、中学校 5 校、近代日本の三大農業教育発祥地の一つである京都府立須知高等学校、森林資源を活用する人材育成の京都府立林業大学校があります。町の人口は、約 1 万 3 千人で平成 17 年の町合併時から約 5 千人が減少し、急速に進む人口減少、少子高齢化が大きな課題となっています。

2 地域に支えられ、地域に期待される学校教育をめざして

(1) 地域と協働した学校づくり、コミュニティ・スクール

本町には、「地域の学校、地域が支える学校」という風土があり、コミュニティ・スクールが導入される以前から、それぞれの小学校に学校支援組織が存在していました。平成 16 年のコミュニティ・スクールの制度化に伴い、すべての小学校で学校運営協議会と地域学校協働活動へと移行しました。その契機となったのは、平成 18 年度に丹波ひかり小学校が京都府初のコミュニティ・スクールとして文部科学省から指定を受けたことです。

同校の学校運営協議会と地域学校協働活動の「みのり会」では、参画と協働をキーワードに、子



丹波ひかり小・読書ボランティア

供のための地域主体の学校づくりをめざしています。多くの地域住民が、登下校の見守りから学習支援・読書支援・食育・栽培学習・環境整備など幅広い分野で学校づくりに参画し、地域住民と児童、保護者が相互に響きあう交流型の学びあいがあります。本町では、すべての小学校区で、地域のよさを生かした「地域と共に歩む学校」づくりを進めています。

(2) 地域の伝統文化を学び、継承をめざす取組

本町の学校教育の特色の一つとして、地域の伝統文化を学ぶことを通じて、後継者の育成をめざす取組をしています。特に、京都府や本町指定の指定無形民俗文化財「和知人形浄瑠璃」「和知太鼓」など多くの伝統文化が伝承されている和知地域では、小中連携を生かして和知小学校から和知中学校まで、それぞれの保存会から指導支援を受けています。特に、中学校の段階では、「和知太鼓」か「和知人形浄瑠璃」のいずれかを選択し、「和知人形浄瑠璃」では「人形遣い」「語り」「三味線」を専攻し、卒業段階では生徒たちだけで公演ができるレベルに到達します。こうした学びの成果は、同じく人形浄瑠璃を継承す



和知中・和知人形浄瑠璃

る南あわじ市の三原中学校郷土部との交流、国際博物館会議（ICOM 世界大会）の子どもフォーラム（令和元年）での公演、全国高校生伝統文化フェスティバル（令和3年）での特別招待公演などのように、多くの発表の機会を得ています。児童生徒にとっては、地域の伝統文化を学び表現することにより地域や地域の歴史とつながり、地域にとっては、次代の担い手を育む機会となり、地域と学校が一体となって伝統文化を通じた持続可能な地域づくりに取り組んでいます。

（3）地域と学校が協働した「学校を核とした地域づくり」

さらに地域の人口減少が進むなか、魅力ある学校づくりを通じて地域の活性化につなげる取組をしています。本町で最も小規模な小学校がある竹野地域では、地域の子供は地域全体で育むという伝統が今も色濃く息づいています。平成27年に設立された住民自治組織「竹野活性化委員会」のバックアップのもと、学校での学習活動はもとより地域と学校が共催する運動会や地元の登山会、地元の産業バジルオイルづくりで、栽培、加工、販売までの体験活動、住民が集まるサロンでの出前発表など、地域と学校が一体となって教育と子育てに取り組んでいます。地元の住民組織では、地域ぐるみで進める教育と子育ての魅力を全国に発信し、京都府内はもとより全国から、子育て世代を中心に移住を受け入れています。この7年間で、移住家庭が29家庭の88人、幼児や小中学生では35人となっています。現在、竹野小学校の在籍児童の60%が移住家庭の児童で占められています。地域と協働し、学校教育の充実と地域の活性化が進み、「学校を核とした地域づくりの竹野モデル」として他の市町村や地域から注目されるようになっていきます。

3 地域をフィールドにした課題解決型の探究的な学び「京丹波ジュニア世代の学びと提案」

人口減少と少子化が進む本町にとって町の将来を担う次世代の育成は、さらに重要な課題となっています。町内3中学校では、地域や町役場などの支援を受け、地域をフィール

ドに「正解のない問い」への課題解決型の探究的な学びに取り組んでいます。その契機は、瑞穂中学校が令和元年度から3年間、京都府教育委員会指定の「未来の担い手育成プログラム」として、連携企業の（株）美濃吉食品から「新しい和食の在り方を創造して、和食文化を広める」という課題をいただき取り組んだことです。令和4年度から、丹波栗の主要産地である本町役場から、特産品である「京丹波栗の担い手育成プラン」という課題を出してもらうことにしました。町の農林振興課や商工観光課からの講義、グループでの仮説の設定、フィールドワーク（地元の栗マイスターや栗畑の実地調査、道の駅での調査など）を通じ、解決プランにまとめ、代表グループが京都府主催「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」において最優秀賞を受賞することができました。本町では、こうした課題解決型の探究的な学びの発表機会として町内3中学校と地元高校を対象に「京丹波ジュニア世代の学びと提案」を開催し、学校教育や社会教育の関係者、町長をはじめとした役場職員や町議会関係者などに公開しています。これらの取組により、次世代の主権者としての参画意識の醸成、学校外の関係者から評価をうけることによる自己効用感や自己肯定感の育成、さらには地域からはジュニア世代への期待感の高まりなど地域と学校教育を結ぶ役割も果たしています。

4 おわりに

少子化と人口減少は、今後の日本社会の避けて通ることのできない課題となっています。それぞれの市町村が、地域の将来をどのように見すえるのか試されています。私たちの町では、「人づくりは、町づくり」を掲げ、地域と学校が協働した取組をさらに進めることにより、持続可能な京丹波町を見すえています。



教育長
松本 和久